土佐湾において“こたか丸”で採集されたニギス属の2新種

【研究課題名】
我が国周辺資源評価調査
【実施年度】平成21～23年度

資源管理研究センター　資源生態グループ
梨田一也

目　的

土佐湾には600種以上の魚類が生息しています。高知で“沖うるめ”と呼ばれるニギス *Glossanodon semifasciatus*（図上段）は底魚類の中でも漁獲量が多く、沖合底びき網漁業の主要対象種となっています。これまで日本周辺に分布するニギス属魚類は、ニギスとイチモンジイワシ *G. lineatus* の2種とされていました。この他、見た目のよく似た別属のカゴシマニギス *Argentina kagoshimae* がいます。ニギスの新規加入量調査で得られた標本を精査したところ、これまで知られていなかったニギス属魚類2種の存在が明らかになりました。

方　法

ニギスの新規加入量調査は、調査船“こたか丸”（59トン）によって土佐湾中央部の水深120m、150mと200mで底びき型幼魚ネット（袋網部の目合い2mmの小型オッタートロール）を用いて行いました。採集した試料は船上で大まかに選別した後に研究室へ持ち帰り、高知大学理学部の遠藤広光教授のグループと共同で精査しました。

結　果

イチモンジイワシとニギスの外部形態の違いは明瞭ですが、従来、イチモンジイワシとしていた試料の中に少し形の変わった個体が混じっていました。精査したところ、イチモンジイワシとは脊椎骨や鰓耙の数に明瞭な違いが見つかりました。そこで新種コタカニギス *G. kotakamaru* として報告しました（Endo & Nashida 2010：図中段）。また、ニギス試料の中に色の薄い個体を見つけました。精査したところ、体色はニギスよりも白い乳白色で頭部が短く、成熟サイズも小さい（雄65mm、雌72mm）ことが判明しました。これらからニギスとは別の種と確認し、ツマリニギス *G. microcephalus* と名付けました（Endo & Nashida 2012: 図下段）。

学名に“こたか丸”の名がついた生物は、1992年に報告された巻貝のコタカエゾボラ *Neptunea kotakamaruae* 以来です。

波及効果

今回の研究は漁業的に利用されている魚の中にも未知の種が生息している可能性を示しました。それらの種が明確にされることにより生物多様性の把握や適切な資源管理に役立つことが期待されます。

図　ニギス属の日本産3種：
上段，ニギス（標準体長195mm）（中山直英氏提供）；
中段，コタカニギス（62mm）；
下段，ツマリニギス（97mm）（遠藤広光氏提供）

参考文献

Endo, H. & K. Nashida (2010). *Glossanodon kotakamaru*, a new argentine fish from southern Japan (Protacanthopterygii: Argentinidae). Bull. Nat. Mus. Nat. Sci. Ser. A, Suppl. 4: 119-127.

Endo, H. & K. Nashida (2012). *Glossanodon microcephalus*, a new argentine fish from Japan and the South China Sea (Protacanthopterygii: Argentinidae). Bull. Nat. Mus. Nat. Sci. Ser. A, Suppl. 6: 17-26.